

島根の地域医療

第1号 島根県健康福祉部医療対策課 '02. Apr. 30
e-mail: iryou@pref.shimane.jp
▲いつでもどこでも適切な医療が受けられる島根を目指して▼



◇島根の地域医療 創刊へ

観測史上初めてという“暑い”春が過ぎていきますが、いかがお過ごしでしょうか。平成14年度も新たにスタートし、医療対策課としても心機一転業務に邁進しております。

さて昨年10月に「島根の地域医療創刊準備号」を発刊いたしました。少々間が飛んだものの正式に第1号をお届けします。特に今年度の当初予算においては、島根県の将来を左右するといっても過言ではない「緊急へき地等勤務医療従事者確保対策」を新たに立ち上げましたので、今回はそれを中心にお送りします。

中山間地、離島の病院・診療所においては医師の不足だけでなく、無医地区が多くあり、開業医の高齢化が進み後継者がいないなど、県全体の緊急的な課題となっています。そこで、島根県ではへき地の医療機関等への医師確保を図るために、総合的な取り組みを開始しようとしています。

そうした中で、県外在住の県出身医師等に島根の医療や地域の情報を提供し、島根にUターンJターンをしていただくのが本紙の目的です。さらに県出身以外の医師がIターンされる呼び水ともなればこれ以上の喜びはありません。

今後は各健康福祉センターや医療機関にも執筆をいただくつもりでおりますので、ご協力をお願いします。また読者からの投稿もお待ちしております。

【島根県庁医療対策課の連絡先】

E-mail ◆ iryou@pref.shimane.jp

TEL ◆ 0852-22-5251

住所 ◆ 690-8501 松江市殿町 1

◇緊急医師確保アンケートの 結果まとまる



多くの読者にはこの機関紙創刊準備号とともに「医師確保緊急実態調査(アンケート)」

をお願いいたしました。その結果がまとまりましたので、結果報告書とともにお送りします。

将来島根県に帰って働きたいという意志をお持ちの方が、回答を寄せてくださったうちの3割近くもあったことや、今後情報提供を希望する方が4割もおられたことは予想以上で、大いに力を得たところです。今後とも施策の充実に努めてまいります。

改めまして今回の調査にご協力いただきました皆さまに厚くお礼申し上げます。



県のドクターバンクから

●14年4月22日現在の情報

<求人>13件

邑智郡-病院/泌尿器科,放射線科,整形外科,精神科◇鹿足郡-病院/内科◇仁多郡-病院/内科◇浜田市-病院/内科◇飯石郡-病院/内科◇出雲市-診療所/胃腸科,肛門科◇益田市-病院/内科,精神科◇松江市-病院/内科◇邑智郡-病院/内科,整形外科,在宅医療◇松江市-その他/健診◇隠岐郡-病院/老人医療

<求職>2件

内科/糖尿病・腎臓/松江市又は出雲市及びその周辺希望◇行政機関・企業の健康管理部門 /県東部地区希望

●ドクターバンクの専用電話は(0852)21-8813(島根県医師会館内)。ホームページ URL は、<http://www.shimane.med.or.jp/dcbank.htm> です。【島根県医師会】

◇緊急へき地医師確保対策が スタート

島根県の医療対策にとっては究極的な政策となる「緊急へき地等医療支援対策事業」をご説明しま

す。

この事業は、第1に県外の医師で島根県でへき地医療に携わる意欲のある方に対して積極的に情報発信し、U・Iターンを促進することです。第2に奨学金制度を設けて将来地域医療に従事する医師を確実に確保するという方策です。これらの方々が長く地域医療に貢献していただくためにも定期的の中核病院等で研修を受けられるような仕組みづくりを考えております。

この事業のポイントは次のとおりですが、詳細は島根県ホームページ「健康福祉情報」にも掲載しておりますのでご覧ください。

◇緊急へき地等医療支援対策の概要

■へき地等医療支援機構の創設

広域的なへき地等医療支援のための企画・調整や代診医派遣の調整等

■医師確保対策

①へき地勤務医師プール制創設

へき地勤務と県立中央病院等での研修をローテーションで行ったり、へき地代診医制度を拡充するなど、中央病院を基点とした新たな勤務体系を構築

②島根医大との連携強化

島根医大卒医の県内定着率を上げるため、中央病院における研修枠を創設したり、民間医療機関への代診医派遣のシステム化を検討

③医療人材センターの創設

地域医療に関心を持つ医師等を登録し、情報交換、相談を行い、リタイアドクターネットワーク(赤ひげバンク)と一体的に運営

④ブロック制の推進

医療圏単位でブロック制を充実させ、市町村単位の小規模ブロック制の導入、専門診療科ブロック制の導入を検討

⑤へき地医療奨学金貸与制度

島根医科大学卒医の県内定着を図るため、新たな奨学金貸与制度を創設

⑥地域医療等研修会の開催

自治医科大学学生と島根医科大学の奨学金貸与者等を対象にした夏季研修を定期的に行う

地域医療最前線その2

陽光がまぶしい隠岐島にて、都万村国民健康保険診療所*1(無床)を訪問し、総合センター長の山田医師(自治医大卒11年目)に話をうかがいました。4月に赴任したばかりという加藤医師(自治医大卒5年目)は急患の対応でお忙しかったのですが、ともに温かく精悍な感じの青年医師で内科医です。

知的障害者援護施設仁万の里があり、高齢化率が高い都万村では診療所が頼りにされており、外来は一日50人~70人と超多忙です。月木の午後は那久地区への出張診療があり、二人の医師が交代で出かけます。隠岐病院との*2ブロック制による診療へはどちらかのDr.が出かけて多くの症例にあたります。

赴任時にハードの立派さに目を奪われたという山田Dr.。村民総意でもって作られた基本構想のもとに、村の中心地に総合福祉施設を置き、診療所、歯科診療所、保健センターとともに保健、医療、福祉の一元化が平成9年に実現しました。

離島の医療はどうあるべきかと語る山田医師。本土はどんなに山深いところでも陸続きで選択の幅があるが、離島は選択肢がない故にかかりつけ医が大事だと。まず予防医学的な観点から健康教育に力を入れ、患者さんが自己管理をできるようにしたいと考えておられます。むしろ隠岐病院へは患者さんを行かせないこと(いい意味で)が目標だとおっしゃいます。

またリハ医や専門職がいると目に見えて生活の質(QOL)は高まるので、県の地域リハ人材確保対策に期待していると。安心して住み慣れた自宅に戻るためにはリハとかかりつけ医の役割が大きいと力説されました。

同席されていた春木村長は、9年度に医師2名体制になってからは村民がとても受診しやすくなった、二人のDr.は患者が多いのによく診てくださり感謝していると期待を寄せられました。

*2ブロック制とは、拠点となる病院と近

隣の診療所との間で週1、2日診療所医師が病院で勤務し、代わりに診療所では病院医師が専門診療を行う。学会や研修会出席時の代診を相互に行う医師の相互交流システムともなる。

*1都万診のホームページアドレス <http://fish.miracle.ne.jp/tumasin/>



求む！赤ひげ先生

◆へき地勤務医確保へ対策／島根県がバンク創設◆

へき地勤務医の確保に向け島根県は、十八日発表した新年度予算案で、第一線を退いた医師を活用する「赤ひげバンク」の創設や島根医大などの卒業生の県内定着を促す奨学金制度の利便性アップなど、あの手この手を打ち出した。／へき地医師確保対策事業で八千六百万円を計上。島根県立中央病院に、へき地派遣の代診医について四人分の枠を新設し、派遣しやすい環境を整えた制度と、県内勤務に関心を示す都会地の医師に、U・Iターンを働き掛ける事業も展開する。／赤ひげバンク制度は、大学病院を退職した勤務医などを念頭にバンクへの登録を呼び掛け、へき地の非常勤医や代診医として活躍してもらう。隠岐島に他県から移り住んだ医師がいたことをヒントに創設した。／島根医大生などを対象とした奨学金は、貸与期間と同期間へき地で勤務すれば返還が免除される。これまでの制度では利用者全員が奨学金を返還し、へき地勤務に結び付かなかった。／このため、三年間だった返済猶予期間を最長で十四年間まで延長するなどの改善を図った。県外転出が七割に上る島根医大生の将来的な県内定着を側面から促す。／島根県内の人口十万人当たりの医師数は二百二十八人で全国平均を約三十人上回っているが、島根医大や県立中央病院のある出雲市に偏在。中山間地や離島では医師不足が深刻な課題になっている。

【山陰中央新報02.02.19より抜粋】

◇県西部医療の充実に向け

県西部医療提供体制整備計画書ができあがりました。この計画は、県西部において不足する医療機能のカバーするために、各中核病院

が今後新たに整備すべき医療機能を位置づけています。医療審議会の西部医療部会から出た「提言」をもとに、地元の方々の意向や地域の実情をより反映させ、各圏域ごとの分科会を主体として検討を重ねました。二次、三次、救急医療機能に関する役割分担と連携、リハビリテーション機能整備に関する支援、医療従事者、特に医師の確保とへき地医療の推進を柱とするものになっています。

計画に基づいて整備が進めば、県西部地域の医療機能はかなり充実しますので、今後とも人々が安



心して生活できるよう医療提供体制の充実に向けて努めてまいります。

肝要は"人"という機能です。どんなに立派な施設や設備があってもそれを使いこなす、患者さんとよき接点となれる医療従事者を我々は求めています。



None Blue Rose



赤ひげ。山本周五郎の小説や黒澤監督でご存じだろう。江戸期、小石川養生所に働いて見習医保本は医長の赤ひげ新出と関わる中で人間は何のために生きるのかと悩む。貧困と病苦を野放しにする社会が背景。献身的に治療にあたる赤ひげに、保本は人生観を変えられる◆島根県では赤ひげバンクを始めた。県内外でリタイアされた医師を登録して地域医療の場でさらに活躍していただく。医療人材センターでは現役の医師にも様々な情報を提供しつつ、U・Iターンの気運を作ろう、島根で活動していただこうと考える◆現代の私たちは江戸庶民とは比べることもできない環境に暮らす。衛生的で便利な毎日。コンビニはなくとも火急の時には救急車が来てくれる。地域の人々は赤ひげ先生に見守られつつ、朗らかで親しみのある暮らしを求めている[F]

※真に青い薔薇は園芸家の夢。英語のBlueRoseは不可能という意味です。NoneBlueRoseは私たちのへき地医療への熱いメッセージです。